
いもの再認識と利用

財団法人 いも類振興会

理事長 生天目 健 蔵

韓国米の輸入に関連して、日ごろ米の減反政策に反対の立場をとる人達の中に、米作に対する国の政策に、批判の声が上りかけたが、米の大豊作がはっきりしたので、政治問題化することだけは、おさまったようである。

然し、天候次第で、豊凶という極端な収穫をもたらす稲作に、耕ではかったような作付反別を押付けること自体、本質的に問題がある。ここまで減反政策を徹底化した以上、今後は、国の買上げ数量だけを各都道府県に割り当て、あとは自由に作付けさせて、自主流通米を豊富にすべきではないだろうか。

そのために、政府米が滞貨し、自由米の価格が低下すれば、それはそれなりに、国民生活に大きく寄与することになる。殊に、余剰米等が多量に在庫すれば、それは米作農家に貢献し、アフリカ等の食糧不足国に譲与することによって、世界の食糧危機にも役立つことになるのではないか。

同じようなことが、イモについても考えられる。米ソの対立は、深刻なものがあり、再選された米大統領は、再選早々ソ連との協調を発言しているが、膨大な軍備を、相互に拡大しながら、仲良くやろうと云っても、誰も信用はしない。それでも、軍備を充実することのできる米ソは、なんとか一触即発のとこ

ろで、持ちこたえることができようが、アメリカの指摘通り、鉄砲ダマが3日分しかないというわが国では、傍杖を食うだけで、不沈空母どころか、日本列島沈没の悲劇を免れない。

そのとき、どうして食糧を確保することができるか。日本海には、既に三十数隻にわたるソ連の潜水艦が蠢動していると報道されている。飽食時代などというのは、間もなく南柯一朝の夢と化すことであろう。そのときは、大東亜戦争の前後が示したように、食糧は再びイモに頼らざるを得ないであろう。然し、その時になってからでは間に合わない。

従って、そのときに備え、今からイモ作の振興に備えるべきではないか。ただ、現状では、必ずしも質の良いイモばかりではない。また、価格においても高すぎる。これらの面に今から着手し、そしてもっとイモの需要を喚起し、消費の面の拡大を図るべきではないか。そのためには、国もまた加工研究所をつくる可きで、同時に民間側でも各企業が結集して、加工部門の研究を促進すべきであると思う。

現代の技術からすれば、イモの高級化利用は、疑いもなく可能で、北海道産の豆類よりより高度の化工が期待できる。識者と業者との緊密な連絡が必要であろう。